

# やぶにらみレコード考

YABUNIRAMI RECORD KOU

## No.7 「いい音」とは？(I)

レコード、CDなどの媒体の如何に関わらず、音楽を再生して楽しまれておられる方々は、常に「いい音」で音楽を楽しみたいと考えられているのではないのでしょうか。

一口に「いい音」と言っても、具体的に「いい音」を定義することは困難であり、それは、ほとんど不可能であるようにも思えます。

しかし、再生や録音の技術の目標としての「いい音」が無ければ、技術開発の必然性が失われかねませんので、たとえ不完全ではあっても「いい音」の定義が、少なくとも技術開発をする側では、必要となってきます。

その「いい音」の一つの定義として、オーディオの世界には「原音再生」と呼ばれる言葉が、まるで原初の昔からそこにあったかのようにして、存在しています。

おそらくは宣伝文句として考えだされた言葉なのかと思われませんが、いつのまにか言葉だけが独り歩きを始め、今ではオーディオが関わるあらゆる場面で、一つの基準のようにして使われています。

この「原音再生」という言葉が使われるとき常に問題となるのが「原音とは何か」ということです。

当然ではありますが、たとえ同一の生演奏を聴いたとしても、聴く場所によって音は変

わりますから、そもそもどの場所で聴いた音が原音なのか？という問題がありますし、仮に場所を指定したとしても、誰が聴いた音なのか？など議論の種には事欠きません。

このような議論は——おおよそ非建設的に——延々と繰り返されてきたのですが、結論への道筋がいつまでも見えて来ないため、ある時誰か、おそらくは評論家の手によって「原音とはマスターテープの音である」という宣言がおごそかに成されました。

このようにして「原音再生」というものは「原音＝マスターテープの音」を忠実に再生するもの、という認識が、狭い世界の話とはいえ、成立したのです。

しかし、ここでまた新たな疑問が生じてきます。一体そのマスターテープの「音」はどこに、どのようにして存在しているものなのでしょうか。

マスターテープの「波形」であればともかくも、「音」を出すためには、どうしてもプレイヤー、アンプ、スピーカー等の再生装置が必要となり、これらの再生装置によって、せつかくの「マスターテープの音」は変貌を余儀なくされてしまいます。

また、聴く場所の話へと堂々巡りしてしまいましたが、再生した音をスピーカーの前1mで聴くのか、5m離れて聴くのかによっても音は違ってきますから話はますますやっかいです。

今回は、この辺りの話をもう少し考えてみたいと思います。

(CLASSICUS K)

当店では、主にクラシックのLPレコード、SPレコードとクラシック音楽に関する輸入古書、国内古書を扱っています。

レコードは、50年代から60年代初期にプレスされたモノラル期のLP、および、器楽曲を含めた室内楽曲と歌曲のレコードを中心に品揃えております。

また、探求レコード、探求書も出来る限り探すお手伝いをさせていただきたいと考えております。

CLASSICUS

antique records

33 & 78 rpm

antique books

101-0051 東京都千代田区神田神保町1-64 神保町ビル1F  
PHONE/FAX 03-3294-6077 OPEN 13:00~20:00 日月祝休  
info@classicus.jp www.classicus.jp